

秋吉久紀夫著 『華北根拠地の文学活動 —抗日戦期の成長と発展—』

高向, 洋人
筑紫丘高校 : 教諭

<https://doi.org/10.15017/9794>

出版情報 : 中国文学論集. 6, pp.83-85, 1977-05-25. 九州大学中国文学会
バージョン :
権利関係 :

秋吉久紀夫著

『華北根拠地の文学運動—抗日戦期の成長と発展—』

高 向 洋 人

あらゆる意味において現代中国の「原型」をなす「根拠地」について、その政治、思想、経済などの面にわたる全面的な研究の必要性が痛感されているが、それにもかかわらず、見るべき研究の成果はあまり多くないというのが実情である。そして特に文学関係の研究においてその感を深くせざるをえない。ところで、「根拠地」についての研究のむずかしさは、せんじつめたところ二つの面に由来する。その一つは「一九四二年以前の第一次資料は、殆んど皆無に等しく、入手し難い状態」（本書あとがき）といわれるほどの資料不足である。もう一つは現代中国の政治路線闘争と解放区での諸々の事件や人物の評価とが密接にからんで、新しい事実の暴露や評価の逆転ということが相つぎ、現在におけるこの分野の研究を非常に困難なものにしていることである。

このような現代中国研究の困難な情況の中で、このたび秋吉久紀夫教授が、『東洋人の行動と思想』叢書の一巻として、『華北根拠地の文学運動—抗戦期の成長と発展—』という画期的な大冊を出版されたことの意味ははかり知れないものがある。現代中国と中国の文学に関心をよせる人であれば誰しもこの書の出版を歓迎せざるおれないで

あろう。

その内容は大きく分けて、

- I 初期の陝北ソ区の文学運動
- II 根拠地の詩歌運動
- III 根拠地における文学様相
- IV 陝甘寧辺区の文学状況
- V 「延安の文芸座談会での講話」とその後

の五章によって構成されている。時間的には一九三五年の八・一宣言が出された時から一九四二年の文芸講話が発表された直後までである。

内容としては、文学の大衆化がどのような経過をたどって進展拡大してきたか。その質的転換はどの時点でのようにしてなされてきたか。また、『延安の文芸座談会での講話』はどのようにして出され、それをみちびき出した力はいったいなにであったのか。というような核心を突く諸問題に詳細周到な検討を加え、つまるところ『講話』が出るより以前に、実は『講話』をささえていた支持層がすでに存在し、その強力な運動の実体が『講話』をおしだしたので

はないか、というのが著者の考えである。もう少し具体的にいえば、一九三〇年ごろ瞿秋白と茅盾が上海で文学の大衆化を論じていた時期、すでに江西ソ区では、農民、労働者、戦士を主体とする文芸運動が発展しつつあったし、また大長征期を経て、さらにそれにつづく抗日戦期においても文学の真の担い手が誰であるかということが漸次明らかになりつつあった。なぜならば、著者の言葉によると、この時期に「労働者や農民への文学」から「労働者や農民からの文学」へという質的転換があったからである。そして著者は、このことこそが一九四二年の『延安の文芸座談会での講話』をみちびきだしたとされる。すなわち、抗日戦期の華北根拠地における文学運動は、最近の文化大革命をも含めて、解放後の文学運動の「素型」をすでに所有していたのである。

きわめて概略ながら以上のような内容を持つ本書は、その顕著な特色として次の二つの点が認められるであろう。第一は叙述がきわめて具体的であるということである。著者は、それぞれの作家について、その経歴、作品の内容、その質的变化といった点を着実にふまえて、当時の文学運動を丹念に追跡している。のみならず、そのような個々の作家や作品を追いながら、さらに巨視的な立場から歴史的にこれを考察し、なぜ『文芸講話』が出されねばならなかったか、それがいかなる状況の下で書かれ、またそれがいかなる文芸作品を生みだしたか等について、具体的な現実をふまえて説明している。なお、本書は「文学運動」ということばを使っているが、それは文学・芸術を含む広義の謂いであって、小説、演劇、詩、美術、歌唱、民謡、歌舞、秧歌などありとあらゆるジャンルの文芸にわたって実に詳細な検討が加えられており、その龐大さに圧倒され

るほどである。たとえば紅軍内の演劇活動を扱った部分など、作者の側の事情、作品の内容、受け手である大衆の反応という具合に、多角的な視点に立って実にこまかく正確に書かれていて、われわれはあたかもその状況の中に自らをおくような気持になるのである。あくまでも事実即して試みようという著者の誠実さがもたらした大きな成果であると考えられる。

第二には、さきの特色と密接に関連するものであるが、資料が豊富であり、叙述が資料に忠実であるということである。著者の現代中国文学に関する資料収集の豊富さはすでに定評があるが、そうした資料収集は単に資料の量だけの問題ではなく、より重要なことは観点の問題であり、方法論にかかわることであることは今さら言うまでもない。事実、本書のどこを見ても著者の資料に対する執念があらわれており、資料自身をして最大限に語らせる苦心が払われて大いに説得力をましている。また本書には実に多くの事がらや人名があげられているので、今後、根拠地の文学を研究するものにとって欠かせぬ道案内となるであろう。のみならず、七十数ヶ所にわたって写真、地図、図版が挿入され、視覚にも訴えて読者の理解を容易ならしめようとする著者の心づかいがうかがえる。

以上のように本書は、研究者はもちろん一般読者の要求をもみたす画期的なものである。しかし、おそらくは著者が紙幅の制限によって割愛されたであろうと推測されるが、私の見るところの諸点ではいまま少しのスペースをさいて著者の言明がほしいところであったように思われる。

① 著者は『「延安の文芸座談会での講話」以前に論争された民間形式、旧形式の利用の問題は講話』によって解決された(二八〇頁)

といい、その成功した作品例として、柯藍の『洋鉄桶的故事』をあげているが、構成、用語、表現などの点で、かつて茅盾などによって指摘された旧形式、章回体小説の欠点などがどのように克服されたのか、『洋鉄桶的故事』という作品そのものに即して説明された方がわかりやすかったのではないか。

② 同じく趙樹理が田間の『趕車伝』を鼓詞に改作したことは、『文学運動から見れば、大きな意味をもっている。』（三二六頁）としているが、鼓詞に改作したことがどのような質的变化をもたらしたのか、さらに実際の作品に即しての説明がほしいのではないか。

③ 周揚、艾思奇、陳伯達の民族形式論を紹介した後、著者は「陳伯達のことばで目だつのは、民族という語の脱階級的解釈であった」（二一五頁）とのべているが、本書に紹介しただけの引用文ではどのように「脱階級的」であるのかわかりにくい。

④ 毛沢東の文芸路線と対立した「王明らの右の路線」（二五六頁）についても、ここに例示された「用筆來發動民衆捍衛祖國」という一文をよんだ限りでは、王明らの文芸路線の具体的内容にふれていないように思えるので、王明らの「右の路線」の文学的内容を紹介してほしいところである。

以上、著者がすでに十分研究を深めておられ、あるいは他の機会に発表しておられるところであろうが、未開ともいうべきこの分野で本書が果す絶大な役割を考えるとき、紙幅の制限があつたとはいえ割愛されたことが惜まれる。

従来、著者の革命文学研究は、中国に関するもの言うまでもなく、さらにアジア・アフリカのそれらにまで及び、その展望の広さが注目されているが、当時延安に存在したといわれるコミンテルン路線

と毛沢東路線との対立なども含めて、「文化大革命」の中で明らかになりつつある新事実などもふまえた著者の説明が今後に期待される。（昭和五十一年八月、東京評論社刊。東洋人の行動と思想 25）